

Case2 医療法人社団清山会 いずみの杜診療所 宮城県仙台市

カテゴリーで人を分けないケア 建物の垣根も 人と人との関係性も 水平を目指した「雑踏ケア」

制服も名札も着けないスタッフと スペースを仕切らない院内設計の意義

いずみの杜診療所に一歩足を踏み入ると、建物のあちらこちらから高齢者の元気な声が聞こえてくる。姿が見えなくても声が響き渡っているのは、建物内にほとんど「仕切り」が存在しないからだ。

同診療所では通所リハビリや認知症デイケアなど、医療・介護のさまざまなサービスが提供されている。人員や設備の基準が定められた現行制度の下では、提供するサービスに応じてスペースにも区分けが求められるが、山崎英樹理事長は「ここに集う人たちは、制度を越えて交流し、お互いに補いあっていますから」と、あえてカテゴリー分けを嫌う。

「仕切り」が存在しないのは、人と人との関係性においても同様だ。同診療所で働くスタッフは制服も名札も身に着けない。患者と医療者の垣根を可能な限り取り払うことで初めて実現できる「人間対人間」の関わりがある。あらゆる意味で「仕切り」が取り払われ、「その人らしさ」と「水平な関係」を追求する同診療所のスタンスを、山崎氏は「雑踏ケア」と呼び、その姿勢は全ての職員に根付いている。

「医療の制度やパターンリズムによって一方的にラベリングされた人間のカテゴリーは、ケアにとってむしろ有害ではないかとさえ思うのです」（山崎氏）

「宅老所のような診療所」を目指して

山崎氏は、介護保険制度も効果的な認知症治療薬もなく、疾患分類さえも未整備だった1990年に「もの忘れ外来」に携わった。94年には政策医療として設置された認知症専門の精神科モデル病棟に勤務し、抑制の廃止や地域のネットワークづくりに努力した。けれども、閉ざされた精神科病院という制約のなかで行われる認知症のケアに、不全感や後ろめた



Drプロフィール

理事長 山崎 英樹 氏

東北大学医学部卒業後、同大学病院、医療法人赤城会三枚橋病院、国立療養所南花巻病院を経て、1999年にいずみの杜診療所を開設。清山会医療福祉グループ代表、医療法人社団清山会理事長、社会福祉法人すばる理事長、医療法人社団真友会理事長。

日本精神神経学会専門医・指導医、日本老年精神医学会指導医、精神保健指定医。仙台大学客員教授、医学博士。



さを拭えなかったという。

そこから前に進むことができたのは、通いを中心に泊りや訪問も自在に行う宅老所に光明を見いだしたからだ。山崎氏は「そこでは、特養に受け入れられず、精神病院で長く入院生活を余儀なくされていたような人たちが、とても穏やかに生活していました」と振り返る。

99年、「宅老所のような診療所」を目指して、いずみの杜診療所を開設した。以来、機能の幅を広げ、施設数を拡大し、仙台市内を中心に40超の医療・福祉関連施設を運営している。現在進めているのは「地域密着多機能型複合施設」の展開である。

もうひとつ、山崎氏が「卒業したい」人間のカテゴリーが「認知症」という呼称だ。

「疾患分類が未熟であったために、認知症という用語が一人歩きしてしまいました。しかし、がんを患ったからといって、その人をがんとは呼ばないように、本来、人を病名で呼ぶべきではないのです」（山崎氏）

point

①「カテゴリー」で人を分けない

患者・利用者と医療従事者が垣根を作らない「雑踏ケア」の実践

②地域密着多機能型複合施設

通所・入所・訪問などの機能を、医療・介護・障がい保育など多分野で一体的に提供

③「認知症」という呼称から卒業

疾患分類の発達にともない、類型分類に過ぎない「認知症」という呼称はもはや卒業すべき

施設プロフィール

開業 1999年
診療科 神経精神科、内科、リハビリテーション科
職員数 医師10名、看護師13名、理学療法士5名、作業療法士5名、言語聴覚士1名、介護福祉士24名、ケアワーカー29名、介護支援専門員10名、管理栄養士1名、事務3名、その他2名、合計103名
URL <http://www.izuminomori.jp/>

■地域密着多機能型複合施設 清山会医療福祉グループのロゴ



賢治画

宮沢賢治が生前に描いたミミズクのイラストを使用。賢治がその作品を読む人々のなかで穏やかに光り輝いたように、地域の医療と福祉にささやかな灯りをともす多機能型の施設を目指していきたいという願いが込められている。